

教育的価値	具体的項目	教育課程
1【いきる】 2【かかわる】	[④夢や希望の大切さ] [⑨仲間や地域の人々とのつながり・⑫自分と地域社会・⑬地域づくり] ・地域に伝わる伝統芸能「中野七頭舞」の継承と小本中からの新たな発信を行う。 ・中野七頭舞保存会など活動を支えてくださる人々との「絆」、および中野七頭舞発表を見ていただく地域の人たちとの「絆」について考える。 ・同世代の仲間との交流の場で、「自らの体験や気持ちを語る活動」に取り組み現在の小本中生からの発信をする。	総合的な学習 学校行事 ・岩手県中学校総合文化祭ステージ発表 （総合的な学習12時間+学校行事6時間ほか） ・玉山区中生との交流活動 （総合的な学習3時間）

【題材】「絆」『**新生！小本中 Stage2**』小本中から新たな発信

～地域文化の継承「中野七頭舞」・仲間との交流「体験・気持ちを語る」取組を通して～

【対象】小本中全校生徒 46名 （1学年 13名 2学年 17名 3学年 16名）

【これまでの小本中】

平成23年度は、「あたりまえの学校生活の活動ひとつひとつを懸命になって活動すること」を掲げ学校生活が始まった。1年間で多くの人々からたくさんの励ましや支援をいただき、交流を持つことができた。生徒たちは、「自分たちが、ふだんの学校生活のひとつひとつを懸命になって活動すること」によって「地域の方々や支援をしてくださったみなさんが心から喜んでくれる」「自分たちが一生懸命やるのが他の人を勇気づけている」という経験を繰り返し、「人々との絆」を実感してきた。

平成24年度は、生徒たちはこれまでかかわってきた地域の方々、また、これからかかわる人々との「絆」を感じながら、「今度はわたしたち小本中から地域の方々に向けて発信をしよう」という目標を持って活動し、「地域の方々への貢献や、交流を持ちお世話になった人たちの気持ちに伝えたい」という願いを持って、以下のような取組（詳しくはH24年復興レポート）を進めてきた。

- ①新しい合唱曲をつくり、歌うこと
- ②中野七頭舞の文化祭発表を復活させること
- ③学年演劇を発表すること
- ④復興祈願おもと青空市への出演、地域の方々に文化祭への参加を呼びかけること
- ⑤仮設住宅を訪問し、地域の方の意見を取り入れた企画を文化祭ですること

平成25年度の重点 『**新生！小本中 Stage2**』

- 1 学校生活の充実を図る
- 2 新しい小本の創造に積極的に関わる
- 3 自分の体験や将来の夢を自分の言葉で語る

【平成25年度の取組】

本年度は、私たちの願いとして次の点を意識して活動内容を考えた。

- ①生徒たちが小本中生として地域の創造に積極的に関わり、自信と誇りを持って活動できること。
- ②同世代の仲間との交流の中で、自分の体験や将来の夢などを語る場を設定し、自分たちが未来にむけてどのように向き合っていくかを考えたり、意見を交流する機会とする。また、それらの仲間と支え合い共に生きていこうとする気持ちを醸成すること。

そこで、これまでの活動を振り返り、発展的に継承しながら、次の取組について進めていくこととした。

実践Ⅰ 岩手県中学校総合文化祭のステージで、地域の伝統芸能である「中野七頭舞」を全校生徒の手で、協力して発表すること。

実践Ⅱ 同世代の仲間との交流で「体験や気持ちを伝える」場を設定し、「体験や将来の夢を自分の言葉で語る」ことを通して小本中からの発信としていく。

本年度は地域に伝わる伝統芸能である「中野七頭舞」の伝承を全校の取組として進め、岩手県中学校総合文化祭でのステージ発表を目標に進めた。また、本校としては初めての試みである同世代の仲間との交流活動において、「体験や将来の夢を自分の言葉で語る活動」に取り組んだ。

私たち教員は、それぞれに役割を担いながら、「中野七頭舞講演会」や「練習会」、「他校との交流活動」などについて企画・立案し、総合的な学習の時間、学級活動、放課後等の活動なども組み入れ、組織的に活動を進めた。

【復興教育の視点】

実践Ⅰ「中野七頭舞」岩手県中学校総合文化祭ステージ発表への取組

かかわる[⑨仲間や地域の人々とのつながり・⑫自分と地域社会・⑬地域づくり]

「中野七頭舞講演会」や「練習会」および「中野七頭舞の発表会」などを通して、地域に住む方々と交流し、自分たち小本中生の活動が地域と深くかかわり、さらに広く社会とかかわりながら成り立っていることに気づかせる。

さらに、地域の一員として自信と誇りを持って、積極的に行動する気持ちを育てる。

実践Ⅱ「体験や将来の夢を自分の言葉で語る」活動

いきる・かかわる

[④夢や希望の大切さ・⑩県内外や海外の人々とのつながり・⑭復旧・復興へのあゆみ]

同世代の仲間と交流を持つ中で、「体験や将来の夢を自分の言葉で語る」活動を通して、互いに理解し共に支え合い生きようとする気持ちを醸成する。また、交流を通して、自分たちが未来のどのような向き合っていくかを考えたり。将来の小本について考え、夢に向かって行動していこうという気持ちを育てる。

【実践内容の紹介①】実践Ⅰ「中野七頭舞」岩手県中学校総合文化祭ステージ発表への取組から

総合的な学習(12時間扱)

学校行事(授業日として1日)

小本中生徒46名

かかわる

⑨仲間や地域の人々とのつながり

⑫自分と地域社会

⑬地域づくり

【題材名】「中野七頭舞」岩手県中学校総合文化祭ステージ発表に向けての取組

【対象】岩泉町立小本中学校生徒46名

【ねらい】

- (1)郷土の伝統芸能について学びそれらを実際に演ずることを通して、郷土の文化に誇りを持たせる。あわせて自分たちが将来にわたってどのように向き合っていくかを考える機会とする。
- (2)感謝・自分たちの活動が、多くの人々の支えにより成り立っていることに感謝するとともに、多くの人たちを勇気づけていることに気づき、自信と誇りを持って活動する。

【活動の概要】

- ①「舞い」23人・「お囃子」12人・「語り」11人の3つの役割を分担して活動。

ア「舞い」：舞いの習得と練習(工藤,菊池(聡),小野寺,井口)

イ「お囃子」：各楽器の演奏の習得と練習(小田島,佐々木,太田)

ウ「語り」：内容の作成・発表練習、プロジェクター等機器操作(菊池(麻),菅原)

○全体統括・渉外(大越副校長)

②中野七頭舞講演会(総合的な学習1時間)

③中野七頭舞練習(校内：総合的な学習11時間)

④中野七頭舞保存会練習(部活動終了後に、公民館・本校体育館等)

⑤ステージ発表(本校文化祭・町内小中学校ステージ発表会、岩手県小中学校総合文化祭の3回)

※中野七頭舞練習会として、放課後、校内の活動がすべて終了後、地域の七頭舞保存会の方にお越しいただき、ご指導いただいた。(9/20,9/27,10/4,10/11,10/25,11/1,11月中旬の7回実施)
また、発表の当日は、保存会の楽器や道具、衣装の貸出や着付けについても協力していただいた。



保存会会長阿部一雄さんからの講話



校内の練習会 上級生から下級生へ



保存会の協力のもと夜の練習会

中野七頭舞保存会(地域)のみなさまからの支援

中野七頭舞保存会は、会長代行の阿部一雄さんをはじめ多くのみなさんが、小学生の頃から機会を捉え、「中野七頭舞」の指導して下さっている。今回、この取組を前に阿部さんをお願いして、全校生徒と職員に向け、中野七頭舞の歴史について講演していただいた。また、夜間の練習会では、「舞い」のひとつひとつに込められた意味やその気持ちを何度も生徒に話しながら精力的に指導していただいた。結果として、生徒と職員だけの取組だけではとても到達し得ないレベルまで達することができ、感謝に絶えない。

【「中野七頭舞」岩手県中学校総合文化祭ステージ発表】

語り部の発表から（中野七頭舞講演会で学んだことをもとにつくられた「語り」）

私たちが生まれ育った緑豊かな町岩泉町は、岩手県の中央部から東部に位置し、本州一、面積の広い町です。小本は岩泉町の東部に位置します。小本中学校は海のすぐ側にあったため東日本大震災で被災し、みんなの自慢だった校舎はもう使うことが出来ません。しばらくは近隣の中学校を間借りしていましたが、今は仮設校舎で生活しています。仮設とはいえ自分たちだけの学校という安心できる居場所があることが本当に幸せです。

初めて校舎に入った日、嬉しくて全校生徒で雪の積もった校庭をかけまわりました。仮設校舎での生活がスタートしてから、「またここから新しい歴史を刻んでいこう」という強い思いを込め「新生小本中」のためにまず、最初に行ったことは、今回披露する中野七頭舞を昨年文化祭で復活させたことです。今回披露する中野七頭舞は天保の飢饉の苦しい時代に、貧しさに負けずに踏ん張ろうという励ましや慰めの思いから生まれた神楽舞が変化した踊りです。

七頭舞は、名の通り七つの道具と踊りから成り立っています。

- ・先打ち：荒野をかき分け進みます。威厳を持って踊ります。
- ・谷地払い：荒れ地を改良するため道具を回しながら舞います。
- ・薙刀：木を倒し、獣を追い払い力強く舞います。
- ・太刀：大切な田畑を守る見張り役ですから勇ましく舞います。
- ・杵：豊作となり餅をつき祝う気持ちで踊ります。
- ・小鳥：豊作を祝い扇子を用いしなやかに踊ります。
- ・ささらすり：人々の疲れを癒し新たに活力を与えるため滑稽に踊ります。



語り部の生徒たちが七頭舞のいわれを語り「舞い」がはじまる。

七種類ある踊りの中から今日舞うのは、農地を開拓するための人材をそろえる「よこばね」、開拓する田畑を襲う邪魔者や獣と戦う「きりあい」、汗水流してみんなで労働に励む「つつとつ」豊作を喜び神様に感謝し舞う「みあし」の4種類です。

津波で被災し道具が流され、活動できない時期もありました。でもこの二年間私たちはそんな辛い今だからこそ地域の方々と共に前を向いて歩いて行こうと、中野七頭保存会の皆様に御指導いただきながら、全校一丸となって七頭舞を踊ることで気持ちを奮い立たせてきました。

今日は小本の誇りである中野七頭舞に、伝統を受け継ぐ喜びや感謝の気持ちを乗せふるさと歴史を深くかみしめ力強く踊ります。



【伝統を受け継ぎ発信する心】

平成25年度「わたしの主張」下北大会 小本中学校代表生徒の発表から

「受け継ぐ」

岩泉町立小本中学校 3年

箱 石 航 成

「ダンツコツコツコダンツコダン、ダンツコツコツコダンツコダン」この身体に流れる力強いリズム。小学校四年生から習い始めた中野七頭舞はわたしの誇りです。

中野七頭舞は今から約二百年前の天保年間に起こった苦しい飢餓に襲われた際、貧しさに負けずに踏ん張ろうという励ましや、慰めの思いを込め踊っていたと言われる、岩泉町小本地区に伝わる芸能です。七頭舞という名の通り、七つの道具と、七つの種類の踊りから成り立っています。

幼い頃、両親に連れられて行った祭りで初めて舞を見た時は、踊り手が身にまとった衣装の美しさや、道具を使った華やかな舞に目を奪われました。「いつかわたしも七頭舞を踊りたい。踊るんだ。」強い思いが心の中に芽生えました。

わたしの通っていた小本小学校には七頭舞を高学年が中学年に教えるという伝承活動があります。わたしも上級生から腰の据え方、足や手の動き、顔の表情まで教わりました。六年生になり舞を教わる側から伝える番になった時、わたしは初めて「受け継ぐ。」ということについて考えました。「わたしが踊っている姿を見て、楽しい踊りなんだということをもっと知ってもらいたい。」そんな思いを込めて教えました。そう思いながら舞っていると、どんどん心も身体も熱くなり舞が終わっても気持ちが高揚していることがしばしばでした。中学生になってからは「中野七頭舞保存会」に所属し、様々な職業や年齢層の方々と一緒に練習をしています。わたしは太刀の役を担っています。太刀は丹念に作り上げた大切な田畑を悪者から守る見張り役ですから勇ましく舞います。息の合った舞を創り上げようと、気持ちを合わせ練習を繰り返すうちに、わたしの中で、この地域の一員として伝統を守っていくのだという思いが日に日に強くなっています。

平成25年、3月11日の東日本大震災で被災し、わたしの宝物である衣装は流されてしまいました。もう舞を踊れない、そう諦めていたところ、母の知人が着物を譲ってくれました。また七頭舞を舞うことが出来ると知ったときは嬉しくて仕方ありませんでした。昨年度は震災後の辛い今だからこそ、地域の方々とともに前を向いて進んでいこうと、文化祭で踊りました。また、今年度わたしたち小本中生は地区の推薦を受け、岩手県中学校総合文化祭の舞台で発表する機会をいただきました。自慢の舞を発信してきます。「受け継ぐ」それはただ技術をつないでいくことだけではないのだ。今はそう思います。地域はもちろん、もっと広い世界に発信し、人間同士の関わり合いを絶やさずに守っていくことこそが本当の意味での「受け継ぐ」ということなのではないでしょうか。わたしはこの手で七頭舞を「受け継ぐ」そう誓います。



【中野七頭舞の発表を終えて】

県民会館を後にして、バスが外山方面へ向かっているとき、1本の電話があり、小本中学校が来年沖縄で開催される全国中学校総合文化祭の岩手県代表として選ばれたことが告げられた。この知らせでバスの中は、一瞬騒然となった。この後しばらくの間、生徒たちはうれしい気持ちを語っていた。1・2年生は来年の向け夢を語り、卒業する3年生は悔しがることばもあったが、みな和気あいあいであった。

この子たちなら来年の取組でさらに、磨きをかけ、自信と誇りを持って全国の場で「中野七頭舞」を発信すると確信できた。



【実践内容の紹介②】実践Ⅱ 玉山区中生との交流会から 「体験や将来の夢を自分の言葉で語る」

総合的な学習（3時間扱） [かかわる] ⑩県内や海外の人々とのつながり
小本中学生46名 ⑭復旧・復興へのあゆみ
(玉山区中学生105名) [いきる] ④夢や希望の大切さ

【題材名】～玉山区中学校と結ぶ絆～

【対 象】岩泉町立小本中学校生徒46名・(玉山区中学校生徒105名)

【ねらい】

- (1) 玉山区中学校生徒との交流を通して、県内の中学生との絆を結ぶ。
- (2) 震災の後これまでの体験や活動のようす、その中で培われた生徒たちの思いを同年代の中学生に伝える事を通して、これからの生き方について考える機会としともにこれからの社会を築いていこうとする気持ちを培う

【当日の内容】

- (1) 小本中生から玉山区中生に伝える(語り部：小本中3年生・生徒会執行部)
- (2) 小本中・玉山区中の合唱・応援活動の交流

①当日の日程

I 対面 11:05～11:20

進行 生徒会執行部

- 1 開会の言葉
- 2 歓迎のあいさつ
- 3 玉山中代表あいさつ
巻堀中代表あいさつ
- 4 コミュニケーションタイム
- 5 閉会の言葉
- ※移動、グループ毎に教室案内

II 交流活動 11:25～12:00

進行 各グループ

- 1 開会の言葉
- 2 語る活動(2, 3人)
- 3 質問・応答
- 4 感想(玉山区中生から感想をいただく)
- 5 まとめ 担当の先生のコメント
- 6 閉会の言葉

III 全体交流 12:05～12:35

進行 生徒会執行部

- 1 開会の言葉
- 2 小本中合唱発表
「いのちの歌」
「絆～かけがえのないあなたへ～」
「あすという日が」
- 3 玉山中応援発表
- 4 巻堀中合唱発表 「明日の空へ」
- 5 感想発表
①玉山中 ②巻堀中
- 6 小本中あいさつ
- 7 閉会



グループ毎の交流活動の様子
写真を提示しながらこれまでの体験を語る3年生徒



玉山中応援披露



巻堀中の合唱
～明日の空へ～



小本中・玉山区中の合唱
～すてきなともだち～



最後ひとつの輪になり、
全員が絆で結ばれた。

【体験や気持ちを語る活動から】

小本中2年生女子 「今の小本」

3年前のあの日、3.11。東日本大震災で私の大好きで大切だった小本は一変しました。あの日から3年がたち、当時小学校5年生だった私は中学2年生になりました。今は大牛内にある仮設校舎で学校生活を送っています。

みなさんに今の小本を知ってもらうために3つのことを話したいと思います。

1つ目は、学校生活についてです。私達は毎朝バスで小学生と一緒に登校しています。今はもう慣れましたが、最初バス通学に慣れず、酔ってしまったりなど辛いと感じることがありました。また、体育館や校庭は小学校と一緒に使っているので部活動の時や昼休み、体育の授業など、とても不便です。仮設校舎で生活していると他にも不便なことがたくさんあります。しかし、私たち小本中生は現在の校舎で楽しい学校生活を送れています。私たちは、おそらく新しい校舎には入れずに卒業してしまうと思います。そこで、仮設校舎でもたくさんのいい思い出をつくって卒業できるようにたいです。

2つ目は、地域の行事やイベントについてです。3.11以来、地域の方々を元気にするようなイベントが増えています。町が企画するものもありますが、小本中でも私たち小本中生と盛岡の高校生が、地域のみなさんに来ていただき、音楽を演奏したり合唱をするようなミニコンサートを行っています。小本中生は地域のみなさんに私たちの元気とがんばりを伝えようという気持ちでこのような催しをしています。最近では8月に行われた復興夏祭りに参加し、「小本さんさ」を披露しました。体育祭や文化祭などに来て私たちの活動を見ていただくことで、地域のみなさんの力にすこしでもなれるよう積極的に活動していきたいです。

3つ目は復興についてです。最近ではテレビで復興の事を報道することが減ってきていると感じます。そこで県内の方は今の小本の現状をあまり知らないのではないかと思います。多くの人は、たぶん順調に進んでいると思っているかなと思います。確かに、少しずつではありますが、復興に向けて進んでいる事があり、小本では、新しい小中学校の建設地が決まり、建てはじめようとしているところです。他にも、新しい駅や保育園、住宅地など新しい小本に少しずつ近づいてきて、復興は進んでいると思います。しかし、まだまだ思うところもあります。建設地は決まったもののそこからあまり変化が感じられなかったり、私たちにとってはもう少しというよりも結構時間がかかるんだと思われることもあります。私たち小本中の2年生は新しい校舎で学校生活を送ることはできません。今の1年生も新しい校舎に入れないかもしれません。私は正直言って新しい校舎で新しい体育館で卒業式をしたいです。でもそれは難しいことだなと感じています。そこで、私達は入れなくても未来の中学生達が楽しい学校生活を送れるように、たくさん町の方に意見を出して私たちが新しい校舎ですごせない分、未来の中学生が充実した学校生活を送れる小本中学校にしてほしいです。

小本が復興するまでには、まだ時間がかかると思うので、私たちが少しでも力になれるよう、支えになれるよう小本未来のために土台になりたいです。あの日から3年が経とうとしています。私は今、仮設住宅に住んでいます。仮設住宅はせまく、便利とはいえません。でも、家族と一緒に暮らしていることは幸せだと思うので、これからも感謝しながら生活していきたいです。幸せだと思ながらもつい言ってしまいます。「今ほしい物は。」ときかれたとき、「家がほしい。」そう答えます。両親は「ん。もう少ししたらネ。」といいます。3年前は自分の家があるのが当たり前だと思っていました。今、自分の家は無いということを考えると、「早く、早く、自分の家がほしい」と思ってしまいます。当たり前だと思っていたことが当たり前ではないことに震災を通して気づくことができました。復興とは、以前の小本や町に戻る事ではなく、前の町よりももっとすばらしい町を創っていくことだと思います。私たちは「今」という時間を大切にしながら、「未来」に向けて歩んでいきたいです。

【巻堀中生からの手紙】 交流会を終え、後日玉山区中学校から小本中生に向け、手紙が届けられた。

私は今日の小本中学校との交流会を通じて、同じ中学生でも、たまたま住む場所が違っただけで異なる経験をしたことにより、考え方が違ってくることを感じました。
私の祖父や祖母の家も沿岸にあり、実際にその地へ行ってたくさんの被災者にうまれる町の姿を見ました。だから私は被災者はひどく絶望しているのだと思う。しかし小本中の方々はみんな明るく前を向いている様子だったのでおなごりました。逆に私が元気をもらいました。これから私も前を向くことをしていこうと思います。

今回の交流を通して、震災に合うつらさや津波の怖さをたくさん知ることができました。また、小本中のみなさんの心の強さも知ることができました。だから、小本中のみなさんはすごいと思いました。
私がもし津波にそうぐらしたら、絶対立ち直れないと思いました。
私たちはこの交流を通して、内陸だからといって東日本大震災を忘れてはならないと思いました。

先日は、小本中の皆さんと交流することができて楽しかったです。貴重な場を設けてくださりありがとうございました。
短い時間でしたが、良い時間を過ごすことができました。
七夕は、少しがっかりしていましたが、生徒の皆さんや先生方の明るい雰囲気もあり、楽しかったです。
実際に被災のお話を聞かせていただいたことは、とても勉強になりました。同じ年代の人に話を聞ける機会は滅多にないので、皆さんの考えや心遣いを知ることができて良かったです。
合唱でも様々な演出があり、最後の最後まで観客が、さらにユメの夢のあるお話を聞いていただき、嬉しかったです。本当にありがとうございました。

震災に対する気持ちがなくなっていたときに、小本を訪ねて、とてもいい機会でした。私たちは経験していない津波の恐ろしさを改めて知ることができました。小本中学校の生徒たちは、心に深い傷をおったにも関わらず、活発的で驚きました。そして、合唱も迫力がありました。その合唱から、皆さんの想いが伝わってきました。最後まで全員で手をなげ歌い、アーチで見送られ、小本中学校の糸の強さを実感できました。元気や勇気を渡りに訪問したつもりが、逆にもらってしまいました。震災に正面に向き合えた、そんな1日となりました。

【取組の流れ】

「体験や将来の夢を自分のことばで語る活動」の取組について 復興教育担当から
小本中生の現在の考え・想いを自分のことばで語らせたい。(生徒の書いた作文を中心に内容を構成する)
第1回：大妻多摩中高との交流会(8月6日(火))3年生のみ交流を行う。(夏休み中の学年活動として実施)
原稿づくり 7月26日(金)～7月31日(水) 写真の選定・印刷・練習 8月1日(木)～8月5日(月)

震災当時のようす、岩泉中仮校舎での生活、様々な方からの支援と交流、台湾のみなさんとの交流など、合唱曲「絆」「すてきなともだち」への取組、高校生との交流～3.11メモリアルイベントへの献歌。地域のみなさんとの関わり、仮設住宅訪問、文化祭への取組、仮設住宅へのクリスマス訪問、復興祈願おもとおおぞら市への参加、新校舎、小本の街についての町長さんとの意見交換、中学生議会など。また、これらによらないものでも伝えたい内容。

第2回：大迫中学校との交流会 9月2日(月) 全校生徒で交流 (総合2時間扱い)

「語る活動」は3年生を中心に、大妻多摩中高との交流会をベースに再構成して行う。今回は1・2年生に向けても①これまで3年間の小本中生の歩みを伝えること、②交流のしかた、会の進め方について学んでもらうことも意識して構成。

第3回：玉山区中学校との交流会 9月26(木) 全校生徒で交流 (総合時間扱い)

当初は3年生に2年生・1年生も加わる形で行う計画であったが、オリエンテーションの段階で1学年に配慮の必要な生徒が見受けられたため、全員で体験を書く活動は一旦中断した。その後1年生については町内の小川中1年生との交流会(10月17日(木))の機会に「あらかじめ送っていただいた小川中生の質問」について個別に選択して答える形で行った。

【玉山区中学生との交流会(「体験や将来の夢を自分の言葉で語る」活動)を終えて】

合唱を通しての交流に加えて、小本中生の体験を同世代の生徒たちに伝える活動は、本校にとって初めての試みであり、8月に3年生を中心に交流した大妻多摩女子中学校・高等学校生たちとの交流や1、2学年の生徒たちも加わり、大迫中学校との交流会に続く3回目の全校活動となった。

出会いの会・ゲームなどを行った後、各教室に分かれ、グループごとに写真を使いながら、震災当時の生活から今の生活について玉山区の中学生に伝え感想や質問を取り入れ相互に考えを伝えるができた。また、体育館での小本中合唱発表や巻掘中の合唱発表、玉山中の応援を通して「応援をしてもらえて嬉しかった」「合唱をしっかりと歌うことができた」「また交流活動をしたい」という意見が多く、達成感とともに離れていてもお互いに頑張っていくという励みにつながる活動となった。玉山区中学校との交流活動は平成23年から3年越しの活動である。これまで、本校生徒が玉山区に出向いての部活動交流が主であったが、今回の交流の経験を活かしながら、今後も工夫しながら展開していきたい。

また、今回の体験で「語る活動」を行うにあたって、本校スクールカウンセラー佐々木恩先生にも立ち会っていただいていた。その中で1年生の生徒の中に、ストレスによる反応と思われる行動が見られたため、生徒たちへの丁寧な対応をしていただいた。また、校内研修会を利用して配慮を必要とする生徒についての情報交換や生徒への対処の方法について講話していただき、「体験を書かせるとき①無理に書かせないこと②教師の目の届く所で行い、家庭など1人での活動にはしないこと」など進め方についても共通理解する場を設けることができた。さらに、交流会の当日は兵庫教育大学の富永良喜先生が活動に立ち合われ、会場の生徒たちに向け、「みなさんの交流活動に立ち会うことができ、感謝の気持ちでいっぱいです。みなさんの熱い思いの取組に感動しました。」などの感想をいただいた。また、交流会後の時間に職員に向けて講演をいただき、「語る活動を行う意義」や「活動を行うにあたって留意すべきこと」などについて改めて職員全員で学ぶ貴重な機会となった。毎年、新しい子どもたちが入学して来る中でこのような活動を進める際、生徒ひとりひとりへの「心のケア」やスクールカウンセラーとの連携の大切さを再認識した。

【小本中学校の語る活動にかかわって】(スクールカウンセラーから)

1.2年生に向けての「体験や夢を自分のことばで語る」活動についてのオリエンテーションを行った際、生徒の中に「東日本大震災」「津波」といった言葉が出てくると、顔をしかめたり、話している先生の方を見ずうつむく、体を揺すりだす、周囲や他の先生の顔を見るなどの様子が見られました。そのため、防災教育及び表現活動を中心とした8項目のアンケートについて、「どのくらい苦しいか」を10段階で評価してもらうことにしました。その結果を見ると、多くの生徒が「まったく苦しくない」と答えていましたが、わずかですが「苦しい」と感じている生徒がいました。「苦しい」と考えている生徒については、当日の観察と事後アンケートをもとに本人と面談をして、リラクセーションの方法などのお話をしました。

このような活動をするときの反省点として、アンケート等で観察を必要とする生徒を捉えたり、事前に、「つらくなったときは、どう動いたらよいのか」を相談しておくこと。そのための生徒の座席の工夫が必要だと思いました。小本中学校の生徒は、自己主張が苦手であり、また大人の言葉に素直に従い、あまり不満を口にしないいわゆる「ものわりのいい子」が多いと思います。だからこそ「つらい」「苦しい」というマイナスの感情表現は特に「悪いこと」と受け止めやすく、無意識に「言ってはいけないこと」と感じている可能性が高いと思います。今後は、「語ることで自分自身の心が楽になりやすいこと」、「語る時期は個人差があるので、自分のペースで行ってよいこと」を伝え、「不安な気持ちになったらリラクセーションを行う」などの対処を定着させていくことがより一層必要になると思います。

小本中学校 スクールカウンセラー 佐々木 恩

【みなさんに伝えたいこと（交流会の活動に立ち会って）】 富永良喜先生からのメッセージ

みなさんの交流会活動に立ち会うことができ、感謝の気持ちでいっぱいです。校長先生はじめ先生方の熱い思いの取組にも感動しました。

私は2011年4月から「いわて子どものこころのサポートチーム」で「心とからだの健康観察」の作成やこころのサポート授業作りをしてきました。そこで大変な体験を表現することの意味をみなさんに伝えたく、お手紙いたしました。

命をおびやかす体験は、トラウマと呼ばれています。心のなかに、記憶のアルバム（箱）があります。「トラウマの記憶の箱のふたは、凍りついていてよく思い出せない、思い出さないようにふたをしっかりとめている」のです。でも、関連する刺激や出来事にであうと、氷がとけて、ロープがゆるんで、ふたがあいて、つらいことがありありと思い出されて苦しくなるのです。それは、とても自然な反応で、心とからだを守る仕組みでもあります。

そんなときこうすればいいよという対処のあり方がわかっています。それは、2段階のステップです。1段階はコントロールです。みなさんのすばらしい合唱表現は、これにあたります。校長先生の熱血指導、みなさんの合唱表現、すばらしかったです。

そして2段階が「向き合うこと」です。自分から、なにを体験したのか、体験をなぞって、話し、書きとめていく作業です。これはすごくエネルギーがいります。ロープをゆるめて自分から記憶の箱のふたをあけるのですから、はじめはドキドキします、苦しい気持ちにもなります。でも、少しずつ、気持ちがコントロールできるようになっていきます。3年生は3回目だったそうですね。がんばりましたね。写真や進行のお手伝いをしていた2年生や1年生も、津波の写真を見てドキドキしたり、先輩の発表を聴いて思い出して苦しくなった人もいるかもしれません。それも、とっても自然な心とからだの変化です。（中略）

表現することは、自分の考えを人に話すことで、そんなふうを考えなくてもいいよ、と思える機会にもなります。担任の先生や保健室の先生やカウンセラーの先生に話を聴いてもらうといいでしょう。

「語る会の前後の自分アンケート」をやってみて、どうでしたか？同じ災害でも体験はそれぞれ異なるので、苦痛度の得点もそれぞれ異なります。また、苦痛度が高い得点の項目と低い得点の項目があるとすれば、震災から繰り返してやってきた項目（低い得点）とあまりやってこなかった項目（高い得点）に分かれていませんか？語る会で体験を発表した人は、前後で得点が下がったものはありませんか。6点前後のものからチャレンジして、ドキドキしても、自分の心とからだを観察します。待っているとドキドキが小さくなったり、2回目は1回目より小さくなっていたりします。得点が低い人も、1年目のころはどうでしたか？

そして、つぎに、みなさんの体験を伝えることです。交流会は、まさに、体験を伝える会でしたね。日本だけでなく、世界に、みなさんの体験を発信してください！

兵庫教育大学 富 永 良 喜

【まとめ】

ここまで、小本中学校の本年度の復興教育の柱となった2つの実践について紹介してきた。

実践Ⅰの「中野七頭舞」への取組は、生徒たちをそれぞれの希望により、「語り」「お囃子」「舞い」のグループに分け全員が発表にかかわる形で取り組んだ。中野七頭舞の保存会のみなさんには、それぞれのグループの生徒の活動に深く関わっていただいた。そのため中野七頭舞を地域に伝わる文化として小本中生全員が理解し、高い水準で学ぶことができた。小本中生たちは真剣な気持ちで取り組み、目を見張るようなスピードで上達し、自信を持って発表に臨むことができた。また、文化祭と町のステージ発表会、岩手県中学校総合文化祭と3度の発表の機会に恵まれ、多くの人たちによるこんでいただいたことで、「語り」「お囃子」「舞い」のどの生徒も「中野七頭舞」の値打ちを感じ、誇りを持って発表していることが感じられた。来年の全国中学校総合文化祭での発表の礎ができたと考える。

実践Ⅱ「体験や将来の夢を自分の言葉で語る」活動では、県内外の中学生・高校生と「語ること」を中心に交流することで、同世代のなかま同士が理解し支え合っていこうという気持ちを双方の生徒が持つことができた。また、「何を伝えたいのか」をひとりひとりが考える過程で未来の自分とどのように向き合っていくかを考えたり、現在の不便さやほしいものをきっかけにしながら、将来の小本について一生懸命考える姿もみられた。

また、「自分から体験をなぞって、話し、書きとめ、人に伝えること」が傷ついた心が立ち直る過程で大きな意義を持つこと、そのためには、個に応じた対応まで考えきちんと手だてを組んで臨むことが求められることを再認識できた。この後小本中に入学して来る子どもたちとかかわっていく上で貴重な経験となった。